

## 史跡等の指定等

## 《史跡の新指定》 9件

### 1 みさきうえいせき チャシコツ岬上遺跡【しやりぐんしやりちょう北海道斜里郡斜里町】

サハリン・北海道・千島列島などオホーツク海沿岸部に広く分布したオホーツク文化終末期を中心とする拠点集落遺跡である。知床半島南西端から海に突き出した標高55mの岬状を呈する海岸段丘上に、8～9世紀にわたって31棟のたてあな堅穴建物や墓、廃棄場等の遺構が密集して営まれた。出土遺物からは、オホーツク海に広く生息する海獣の狩猟や漁労を主な生業とする、海洋適応民としてのオホーツク文化の内容が詳しく明らかになっている。また、古代律令国家で用いられたじんぐうかいほう神功開寶が出土するなど、隣接地域集団を介した本州側との交流があったことが判明した。堅穴建物にはヒグマ骨塚を持つものがあり、独自の動物儀礼が存在したことが示され、動物をかたどった骨偶や木製品の存在には、動物に対する信仰を中心とした世界観があったことがうかがわれる。オホーツク文化はやがて在地のさつもん擦文文化と融合し、地域性の強いトビニタイ文化を形成するが、チャシコツ岬上遺跡では一部にトビニタイ文化期の遺構が認められることから、この文化変容の具体的な様相を知ることにもできる。このように、チャシコツ岬上遺跡は、本州に古代律令国家が栄えた時代の日本列島北辺域における古代文化の実態を知る上で、極めて重要な遺跡である。

### 2 たなぐらじょうあと 棚倉城跡【たなぐらまち福島県東白川郡棚倉町】

江戸時代前期に築城された城跡であり、ひがししらかわぐんたなぐらまち福島県東白川郡棚倉町の中心市街地、やみぞさん八溝山を源流とするくじがわ久慈川が作りだした河岸段丘上の平坦地に所在する。元和8年(1622)に5万石の大名として棚倉藩主となったにわながしげ丹羽長重が、寛永2年(1625)より築城を開始したもので、ひたち常陸と境を接し、おうう奥羽の玄関口に位置する要衝の地を押える役割があったと考えられる。長重は寛永4年(1627)白河へ移封となり、代わって棚倉藩主となったないとうのぶてる内藤信照によって、引き続き城の造営や城下の整備が行われた。その後、城主は徳川譜代・親藩の家柄が入れ替わり、幕末の戊辰戦争では新政府軍と戦い落城した。

城の縄張りは、巨大な土塁と水堀で区画される長方形の本丸と、それを取り巻く二ノ丸、その北西の三ノ丸(はやしくるわ林曲輪)からなる輪郭式の構造である。また、二ノ丸西側崖部には棚倉城で唯一の石垣が築かれている。本丸土塁上には二重隅すみやぐら櫓4棟、一重櫓1棟が建てられ、各櫓間を連結する多門たもんやぐら櫓は東北地方の城郭では随一の規模であった。棚倉町

教育委員会が実施した発掘調査により、多門櫓の礎石や、戊辰戦争時と思われる焼土や被熱した土壁材が出土した。江戸時代前期における江戸幕府の奥羽政策と、寛永期の築城形態の有り様を理解する上で貴重である。

しもてらおにしかたいせき

### 3 下寺尾西方遺跡【神奈川県茅ヶ崎市】

神奈川県の西部、相模川から東に2.5km、標高13mの相模野台地の西端部分に所在する弥生時代の集落跡。遺跡の北から西への比高差は7m前後で非常に良い眺望となっている。

茅ヶ崎市教育委員会による発掘調査の結果、弥生時代中期後半の宮ノ台式期に営まれた環濠集落跡で、最初に掘られた環濠は東西200m、南北250m、面積約40,000㎡、新たに掘られた環濠は東西約400m、南北250mに拡大され面積は約84,000㎡に達した。環濠の内側からは竪穴建物58棟、土器集中地点3カ所、土坑1基、溝2条などを検出している。

遺物では各種土器類のほか、磨製石鏃などの武器、太型蛤刃石斧・挟入柱状片刃石斧、磨石・敲石類、砥石などの工具からなる石器・石製品、板状鉄斧などの鉄器が出土している。また、勾玉、管玉などの装身具も出土し、勾玉は長さ6.09cmの大型の未成品である。

本遺跡は弥生時代中期後半における南関東最大級の環濠集落で、その成立から解体までの過程を知ることができる点で重要であり、集落がほぼ完存する稀有な事例でもある。石器と鉄器が出土し、南関東における鉄器化の実態を知ることができる。南関東における弥生時代中期後半の社会を知る上で重要な遺跡である。

なお、本遺跡は古代の史跡下寺尾官衙遺跡群（18 ページ参照）の指定地の大半と重複して史跡となる珍しい例であることを申し添える。

じょう やまこふん たいないし

### 4 城の山古墳【新潟県胎内市】

新潟県北部の沖積地に位置する古墳時代前期（4世紀前葉）に築造された古墳である。内水面を通じて阿賀野川につながる紫雲寺潟の北岸、日本海と内陸部とを結ぶ水上交通の要衝に立地している。周辺には、同時期の集落や生産遺跡が認められている。また、この地域は、続縄文土器が散発的に見出され、7世紀には、湍足柵や磐舟柵が本地域周辺に築かれたと推定されるなど、ヤマト政権と北方世界が交わる境界の地に当たる。

胎内市教育委員会による発掘調査によって、直径約40mの円墳である可能性が示さ

れるとともに、未盗掘の状態で検出された全長約8m、幅1.5mの舟形木棺からは靱<sup>ゆぎ</sup>3点や盤<sup>ばん</sup>龍<sup>りゅう</sup>鏡<sup>きょう</sup>1面をはじめとする豊富な副葬品が出土した。

古墳時代前期は、前方後円墳や前方後方墳に加え、大型の円墳が各地に拡散する時期に相当するが、城の山古墳は現在までのところ日本海側における最北端、従来の北限であった阿賀野川よりも北に立地している。また、豊富な副葬品はこの古墳の被葬者とヤマト政権との密接な関わりを想定させるもので、ヤマト政権の北国政策の一端を示すものとして重要であるだけでなく、古墳時代前期の社会や地域の動向を考える上で、極めて重要な古墳である。

## 5 甲府城跡【山梨県甲府市】

山梨県甲府市の中心部、一条小山<sup>いちじょうこやま</sup>（標高約300m）と呼ばれる比高約30mの独立丘陵に築かれた、近世の平山城跡である。天正18年（1590）豊臣方の支配地となった甲斐は、関東の徳川氏への抑えとして重要視され、豊臣一門や有力武将が配置され、浅野長政・幸長親子<sup>あさのながまさ よしなが</sup>によって本格的な甲府城造営が進められ、慶長5年（1600）頃までに完成したと考えられる。関ヶ原の戦いの後は幕府直轄となり、城番制の時期を経て、徳川綱重・綱豊（後の家宣）<sup>とくがわつなしげ つなとよ いえのぶ</sup>が藩主となった。その後、柳沢吉保<sup>やなぎさわよしやす</sup>が甲府藩主となり、大規模な城の改修が行われた。柳沢氏の移封後は再び幕府直轄地となり、甲府勤番支配<sup>こうふ きんぱん しはい</sup>が管理し幕末に至った。

城の縄張り<sup>すき</sup>は、丘陵頂部の本丸を中心として、その周囲に天守曲輪<sup>てんしゆくるわ</sup>、稲荷曲輪<sup>いなり</sup>、数寄屋曲輪<sup>すきや</sup>、鍛冶曲輪<sup>かじ</sup>といった曲輪を階層的に配置するもので、本丸の西側下に帯曲輪<sup>おび</sup>を挟んで二の丸と楽屋曲輪<sup>がくや</sup>等を設け、これらの曲輪群を内堀が取り囲む。各曲輪の城壁は総石垣造りで、本丸・稲荷曲輪を中心に築城期の野面積み石垣が残存する。発掘調査によって、鉄門<sup>くろがねもん</sup>・銅門<sup>あかがねもん</sup>、煙硝蔵<sup>えんしょうぐら</sup>、地盤補強と思われる地中石垣、石切場遺構等を検出し、築城期と考えられる金箔の鯨瓦<sup>しやちがわら</sup>や鬼瓦<sup>おにがわら</sup>を含む多数の遺物が出土した。また、城跡北東にある愛宕山<sup>あたごやま</sup>の山裾部では築城に伴う石切場も見つかった。

東日本における初期段階<sup>しよくほう</sup>の織豊系城郭として、我が国近世の政治・軍事の歴史を知る上で貴重である。

## 6 船来山古墳群【岐阜県本巣市】

濃尾平野の北縁部に所在する東西約2km、南北約600mの独立丘陵である船来山に造られた、約290基の墳丘墓及び古墳からなる古墳群。

古墳群としての造営は弥生時代終末期の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼに始まり、古墳時代前期前半には丘陵西部の主尾根上に主に前方後方墳や小型の方墳が築造される。前期後半には古墳群中最大規模となる墳長65mの前方後円墳である5号墳が丘陵西部に築造されるとともに、丘陵中央部・丘陵東部の主尾根上を中心に前方後円墳や小型の円墳・方墳が築造される。

古墳時代中期前半には古墳の築造は見られないが、中期後半から再び活発な古墳の築造が行われることとなり、中期末から終末期にかけて丘陵中央部及び丘陵東部の支尾根上を中心に多数の横穴式石室が築造される。7世紀後半から末には古墳の築造数が激減し、古墳群としての終焉を迎える。

古墳時代前期並びに後期・終末期を中心として、墳形や埋葬施設の形態、そして古墳の築造箇所を徐々に変えつつも、同一の独立丘陵を墓域として利用したもので、東海最大級の古墳群として当時の社会的関係や墓制の在り方を知る上で重要である。

## 7 勝山御殿跡【山口県下関市】

幕末、長門国ながとのくににあった長府藩ちょうふはんによって築かれた藩主居館跡である。山口県下関市の東部、三方を山に囲まれ南に開けた扇状地の奥に立地する。

幕末の開国に伴う攘夷じょういの高まりの中、萩藩は文久3年（1863）5～6月、下関海峡を航行する外国船を攻撃した。本藩に従い攘夷戦の準備を進めていた支藩の長府藩は、海岸沿いの長府から内陸部の勝山に藩主居館を移転することとし、同年6月に造営を開始、緊迫した状況下で工事を急ぎ、11月、城郭としての規模・構造を有する新居館を完成させた。以後、勝山御殿は幕末の動乱の中で長府藩の拠点として機能した。

下関市教育委員会による発掘調査等により判明した勝山御殿跡の構造は、南北に直線状に並ぶ連郭式れんかくしきをとり、南側の最前面に大手口を有する三の丸、その背後に弧状に配列する城壁に囲まれた二の丸、さらにその背後に配置された本丸からなり、城壁はいずれも石垣造りである。また、幕末期の台場と同様に、砲撃戦を意識して城堡が土塁と石垣で構成される点が特徴的である。従来の近世城郭と台場の両者の構造を取り入れて築造した近世最終期の城郭であり、幕末期の緊迫した軍事状況と当時の築城技術を知る上で貴重である。

**8 高松藩主松平家墓所【香川県高松市・さぬき市】**

讃岐国高松藩初代藩主松平頼重よりしげ以下、明治維新に至るまでの高松藩の歴代藩主を葬った大名家墓所である。

高松松平家は、徳川御三家の一つ水戸徳川家から創設された大名家で、御三家等に次ぐ高位の大名であった。墓所は、初代頼重よりとよ、3代頼豊よりたけ、4代頼桓よりたか、5代頼恭よりざね、6代頼真よりおき、7代頼起よりのり、8代頼儀をはじめ正室や一族墓が営まれた高松松平家の菩提寺である法然寺ほうねんじの般若台墓所はんにやだいぼしよと、水戸徳川家から養子で迎えられた2代頼常よりつね、9代頼恕よりひろが葬られた靈芝寺れいしじの日内山墓所ひうちさんからなる。

法然寺は徳川将軍家の菩提寺と同じく浄土宗の寺院で、本堂や創建以来の主要な堂宇が多く残り、浄土思想を具現化した伽藍がらんを持つとともに、墓所は頂部に突起のある無縫塔むほうとうが約200基あり、全国でも有数の規模を誇る。また、靈芝寺の日内山墓所は水戸徳川家墓所じゅしきと類似した儒式墓であり、周囲を樹叢に囲まれている。双方の墓所とも藩主の思想がよく表れており、近世大名家の葬制を知る上で貴重である。

**9 安徳台遺跡【福岡県那珂川市】**

福岡平野の最奥部、標高約60mで周辺との比高差約30mの台地一帯に所在し、弥生時代の集落と墳墓からなる。集落からは弥生時代中期前葉から後期初頭までのたてあな竪穴建物130棟があり、中には床面に焼土を確認したものや弥生時代最大級の直径15m程度の竪穴建物がある。遺物には舶載鑄造鉄斧の再加工品、青銅器の鑄型かんしきぞく、漢式鍬など中国大陸や朝鮮半島の集団とつながりがあったことを示す資料がある。墳墓では、中期前葉から中期後葉までのかめかんぼ甕棺墓群が検出され、そのうち、並んで検出された中期後葉の2号甕棺の被葬者は男性で、5号甕棺は女性であった。2号甕棺では、棺外から鉄剣1、てつか鉄戈1、棺内からガラス製勾玉等の装身具、ゴホウラ製貝輪43以上が出土した。貝輪は1体に伴う数としては最多である。

人骨が遺存し、身長は男性166cm前後、女性157.4cmで、DNA鑑定によると近接する2棺の被葬者は親族関係であるなど、形質的特質を含め人類学的な成果も得られている。

本遺跡は、弥生時代中期の集落及び墓域の変遷を迫える貴重な遺跡で、福岡平野すなわち「奴国」に比定されている地域の拠点集落の様相を知ることができ、「奴国」を構成する首長間の階層分化の実態を知ることができるという点で重要である。また、弥生時代以来の景観をとどめている稀有な事例である。

## 《名勝の新指定》 1件

### 1 きゅうえきしゅうかんでいえん すもとし 旧益習館庭園【兵庫県洲本市】

徳島藩筆頭家老であった稲田氏の別荘「西荘」に造られた庭園をその始まりとし、洲本の旧城下町外町地区に位置する。敷地は曲田山（標高約55.8m）の北裾に当たり、城下町を整備する際にここから石を切り出し、町の完成後にその跡地を別荘として整備したと考えられている。幕末になって稲田氏の私塾が移設され「益習館」となった。

曲田山を背に設けられた園池の山側部分に複数の巨岩が並び、そのうち最も大きなものは幅が約5.8m、高さは約4mある。これらの巨岩には石材切り出し時の矢穴が残る。植栽は、園池周辺はカエデ類が中心で、山腹より上部は、現在はクスノキやアラカシ等の常緑樹が多くなっている。

発掘調査等から、園池の一部埋め立て、書院の新築等、江戸時代の状況から変わっている部分があることが分かったが、曲田山、巨岩、園池から成る庭園景観の主要部分は大きくは変化していない。淡路島における江戸時代に造られた武家の庭園を起源とする庭園の代表であり、その意匠は独特で優れている。芸術上及び観賞上の価値、日本庭園史における学術上の価値は高く、名勝に指定し保護を図るものである。

## 《天然記念物の新指定》 2件

### 1 どうざんみね ぐんらく 銅山峰のツガザクラ群落【愛媛県新居浜市】

ツガザクラは、氷期に日本列島に到達したツツジ科ツガザクラ属の常緑小低木である。主な分布は東北地方中部から中部地方の高山帯であり、鳥取県の伯耆大山、奈良県のおおみねさんけいはつきょうがたけ、愛媛県の赤石山系に隔離分布する。

指定対象である愛媛県新居浜市の銅山峰のツガザクラ群落は、分布の南限地帯に成立した規模の大きな群落であり、局地風の影響で標高1,400m程度の稜線付近に成立している。ここは風衝地であり、ツガザクラはパッチ状、あるいはマット状の群落を形成し、裸地には実生や稚樹も多く定着しており、良好な自生地であると考えられる。

分子系統解析の結果から、ツガザクラ属の広域分布種であるエゾノツガザクラとアオノツガザクラは単系統であり日本固有種のツガザクラはそれらと姉妹関係であること、ツガザクラの分岐年代は約80万年前と推定されることが示されている。また、ツガザ

クラ種内において、銅山峰の集団は他地域の集団とは異なる遺伝的特性を有することが示されている。これらのことから、ツガザクラは日本の高山植物の起源を理解する上で重要であり、銅山峰のツガザクラ群落は植物地理学的、生態学的、遺伝学的に価値が高く、天然記念物に指定して保護を図るものである。

## 2 たけたしこうばる おおのがわすいけい せいそくち たけたし 竹田市神原の大野川水系イワメ生息地【大分県竹田市】

イワメは河川に生息するサケ科の淡水魚である。その形態はアマゴやヤマメに似るが、アマゴ、ヤマメの体側等に見られるサケ科特有の幼魚斑（パーマーク）や黒点等が見られず、突然変異により生じたアマゴ又はヤマメの無斑型であるとする説が有力である。

イワメが比較的安定して確認される生息地は国内に数か所しかなく、中でも指定対象区域である竹田市神原の大野川水系イワメ生息地では、国内で唯一イワメ単独の生息域が確認されており、500～1,000個体程が生息すると推定されている。近年実施されたDNA解析の結果から、当該生息地のイワメは近隣の大野川水系神原川上流の禁漁区に生息するアマゴと同じ遺伝的クラスターに分けられることが明らかとなり、これらのイワメとアマゴは同一祖先集団に由来し、それぞれイワメ、アマゴという異なる表現型を有するようになったと推測されている。こうした表現型が出現し維持される機序の解明等に当該生息地のイワメは貴重な資料を提供することが期待され、遺伝学上価値が高い。さらに、あまり移動せず定住性が高いことや、産卵期が当該生息地のアマゴより2週間程遅れ生殖的隔離が進行している可能性も示唆される等、生態学的にも貴重な資料を提供している。

当該生息地は、突然変異により生じたアマゴの無斑型と考えられる遺伝学的・生態学的に貴重なイワメが安定的に生息する重要な生息地であること等から、国の天然記念物に指定して、その一層の保護を図るものである。

### 《特別史跡の追加指定》 1件

#### 1 みずきあと 水城跡【福岡県大野城市・太宰府市・春日市】

天智天皇3年（664）、唐・新羅の侵攻に備えて大宰府防衛のため築造された防御施設。全長約1.2kmに及ぶ土塁と濠からなり、古代の軍事を知る上で貴重である。今回、土塁北側の原地形が残っている場所など条件の整った部分を追加指定する。



## 《特別史跡及び特別天然記念物の追加指定》 1件

にっこうすぎなみきかいどうつけたりなみききしんひ

### 1 日光杉並木街道 附 並木寄進碑【栃木県日光市・鹿沼市】

日光東照宮への参詣道として江戸時代初期に設けられた街道。松平正綱<sup>まさつな</sup>が杉を植栽し、東照宮に寄進したことを記録した並木寄進碑が附属する。今回、杉並木の保護を図るため、旧壬生通り（通称旧例幣使街道）沿いの部分を追加指定する。

## 《史跡の追加指定及び名称変更》 1件

も ず こふんぐん

### 1 百舌鳥古墳群【大阪府堺市】

こふん  
いたすけ古墳

ながつかこふん  
長塚古墳

おさめづかこふん  
収塚古墳

つかまわりこふん  
塚廻古墳

もんじゅづかこふん  
文珠塚古墳

まるほやまこふん  
丸保山古墳

ちのおかこふん  
乳岡古墳

ごびょうおもてづかこふん  
御廟表塚古墳

やまこふん  
ドンチャ山古墳

しょうらくじやまこふん  
正楽寺山古墳

かがみづかこふん  
鏡塚古墳

ぜんえもんやまこふん  
善右エ門山古墳

ぜにつかこふん  
銭塚古墳

ぼうこふん  
グワショウ坊古墳

はたづかこふん  
旗塚古墳

てらやまみなみやまこふん  
寺山南山古墳

しちかんのんこふん  
七観音古墳

ごびょうやまこふんないごう  
御廟山古墳内濠

## こふんないごう ニサンザイ古墳内濠

こふんないごう  
(名称にニサンザイ古墳内濠を加える)

4世紀後半から6世紀前半にかけて築造された古墳群。列島最大の前方後円墳である仁徳天皇陵古墳を頂点に、前方後円墳、帆立貝形古墳、小型の円墳・方墳など、様々な規模・形態の古墳からなる。ニサンザイ古墳の周濠部分を追加指定する。

### 《史跡の追加指定》16件

#### しょうにんだんはいじあと 1 上人壇麿寺跡【福島県須賀川市】

古代、<sup>むつのくに</sup>陸奥国南部に造営された8～10世紀の古代寺院跡。一辺約80mの区画に囲まれた中に、南門・金堂・講堂が南北に<sup>がらん</sup>一列に並ぶ伽藍配置をとる。今回、伽藍の後背部分となる既指定地北側を追加指定する。

#### さんやかいつか 2 山野貝塚【千葉県袖ヶ浦市】

東京湾東岸（房総半島西部）に位置する縄文時代後期から晩期の大型馬蹄形貝塚。この地域に集中する大型貝塚群の中で、現存する事例としては最南端に位置する。現在でも馬蹄形の形状をそのまま見ることができる。出土した魚類遺体は、東京湾東岸の中央部に位置する地理的特徴をよく表している。今回、条件が整った部分を追加指定する。

#### したの やいせき 3 下野谷遺跡【東京都西東京市】

縄文時代中期後半の大規模な環状集落。墓と考えられる中央部の土坑群を取り囲むように、<sup>たてあな</sup>竪穴建物群と掘立柱建物群が直径150mの範囲で配置される。規模・内容とも関東では傑出しており、開発が著しい首都圏において遺存状態が極めて良好な遺跡である。今回、条件の整った部分を追加指定する。

#### たちばなかんがいせきぐん 4 橋樹官衙遺跡群【神奈川県川崎市】

古代武蔵国橋樹郡の官衙遺跡。7世紀後半における<sup>ひょう</sup>評の役所の可能性のある建物の出現から、<sup>ぐうけ</sup>郡家の成立及び廃絶に至るまでの経過をたどることができる希有な遺跡。7～10世紀の地方統治拠点の実態とその推移を知る上で重要。今回、条件が整った部分を追加指定する。

しもてらおかんがいせきぐん

## 5 下寺尾官衙遺跡群【神奈川県茅ヶ崎市】

神奈川県東部に所在する相模国高座郡家<sup>さがみのくにたかくらぐうけ</sup>と考えられる官衙遺跡群。正庁・正倉は7世紀末から8世紀中葉まで2期にわたって変遷し、その南西部には下寺尾廃寺跡（七堂伽藍跡）と呼ばれる郡寺が所在している。今回、条件の整った部分を追加指定する。

ななおじょうあと

## 6 七尾城跡【石川県七尾市】

室町から戦国期の能登守護畠山氏の居城として築かれた中世山城。16世紀初頭に畠山氏が府中から拠点<sup>のづらづ</sup>を移し、天正10年（1582）には廃城となる。野面積みの石垣や深い空堀、土塁などの遺構が良好に残り、北陸では最大級の規模を誇る。今回、条件が整った「物見台」と通称される郭<sup>くるわ</sup>と登城道の一部を追加指定する。

おがさわらししろあと

## 7 小笠原氏城跡【長野県松本市】

平地に築かれた井川城跡と山城の林城跡からなる、信濃守護小笠原氏の居城跡。室町から戦国時代にかけての信濃国の軍事的緊張関係及び信濃を取り巻く諸勢力の政治、軍事的な動向を知る上でも重要。今回、林城跡のうち小城について追加指定する。

みかわこくぶんじあと

## 8 三河国分寺跡【愛知県豊川市】

奈良時代、聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺跡の一つ。発掘調査によって金堂・講堂・塔・南大門・東西回廊等を確認した。回廊は金堂にとりつき、塔は回廊外の西側に配置されている。今回、伽藍地北面の築地想定地点を追加指定する。

おうみおおつのみやにしこおりいせき

## 9 近江大津宮 錦織遺跡【滋賀県大津市】

天智天皇6年（667）、中大兄皇子（天智天皇）が飛鳥より遷都した宮跡。大海人皇子と大友皇子との間に起こった壬申の乱<sup>じんしん</sup>（672）によって廃絶した。発掘調査によって、内裏南門・正殿等の中枢遺構が見つかった。今回、内裏の一角を追加指定する。

くにきゆうせき やましるこくぶんじあと

## 10 恭仁宮跡（山城国分寺跡）【京都府木津川市】

奈良時代、聖武天皇が天平12年（740）から足かけ5年間営んだ宮跡。後に山城国分寺に施入された。大極殿の基壇や国分寺塔基壇<sup>だいごくでん</sup>が残り、発掘調査によって二つの内裏<sup>だいり</sup>や朝堂院<sup>ちょうどういん</sup>等が見つかった。今回、条件の整った部分を追加指定する。

ながおかきゅうせき むこうし  
**11 長岡宮跡【京都府向日市】**

延暦3年（784）から10年間、平城京から長岡京に遷都した桓武天皇が営んだ宮跡。発掘調査によって、大極殿・朝堂院・内裏内郭築地回廊等の遺構が見ついている。今回、大極殿院北回廊の一角を追加指定する。

たんばこくぶんじあとなつたりはちまんじんじゃあと  
**12 丹波国分寺跡 附 八幡神社跡【京都府亀岡市】**

奈良時代、聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺跡の一つ。発掘調査によって塔跡、金堂跡、講堂跡、僧坊跡、梵鐘鑄造遺構等が見つかった。今回、既指定地沿いの部分を追加指定する。

おとくにこふんぐん むこうし おとくにぐんおおやまざきちょう  
**13 乙訓古墳群【京都府京都市・長岡京市・向日市・乙訓郡大山崎町】**

てんのう もりこふん

**天皇の杜古墳**

てらどおおつかこふん

**寺戸大塚古墳**

いつかはらこふん

**五塚原古墳**

もといなりこふん

**元稻荷古墳**

なんじょうこふん

**南条古墳**

もずめくるまづかこふん

**物集女車塚古墳**

いげのやまこふん

**恵解山古墳**

いのうちくるまづかこふん

**井ノ内車塚古墳**

いのうちいなりづかこふん

**井ノ内稻荷塚古墳**

いまざとおおつかこふん

**今里大塚古墳**

とりいまえこふん

**鳥居前古墳**

京都府南部の乙訓地域に、古墳時代初頭から終末期にかけて築造された古墳群。畿内地域中枢部の大王墓を含む古墳群の動向と軌を一にした変遷が認められ、古墳時代における政治的動向を知る上で重要。寺戸大塚古墳、五塚原古墳、鳥居前古墳の一部を追加指定する。

ふるいちこふんぐん ふじいでらし はびきのし  
**14 古市古墳群【大阪府藤井寺市・羽曳野市】**

こむろやまこふん  
**古室山古墳**

せきめんやまこふん  
**赤面山古墳**

おおとりづかこふん  
**大鳥塚古墳**

すけたやまこふん  
**助太山古墳**

なべづかこふん  
**鍋塚古墳**

しろやまこふん  
**城山古墳**

みねがづかこふん  
**峯ヶ塚古墳**

はかやまこふん  
**墓山古墳**

のなかこふん  
**野中古墳**

おうじんてんのうりょうこふんがいがうがいてい  
**応神天皇陵古墳外濠外堤**

はちづかこふん  
**鉢塚古墳**

やまこふん  
**はざみ山古墳**

あおやまこふん  
**青山古墳**

ばんしょやまこふん  
**蕃所山古墳**

いなりづかこふん  
**稻荷塚古墳**

ひがしやまこふん  
**東山古墳**

わりづかこふん  
**割塚古墳**

からとやまこふん  
**唐櫃山古墳**

まつかわづかこふん  
**松川塚古墳**

じょうがんにやまこふん  
**浄元寺山古墳**

大阪府の東南部に所在する4世紀後半から6世紀中葉かけて形成された、超巨大前方後円墳をはじめ小型の円墳・方墳等で構成され、列島の古墳時代を考える上で重要な古墳群。現在20基が史跡に指定されている。今回、唐櫃山古墳の中で条件の整った部分を追加指定する。

まきむくいせき  
**15 纏向遺跡【奈良県桜井市】**

奈良盆地南東部に所在する、弥生時代終末期から古墳時代初頭（3世紀から4世紀）に営まれた大規模集落跡。隣接して纏向古墳群や箸墓古墳などが所在し、ヤマト政権と

密接な関わりがあったと考えられる遺跡で、我が国の古代国家形成期の様相を知る上で重要。今回、条件の整った箇所を追加指定する。

やかたこふんぐん  
**16 屋形古墳群【福岡県うきは市】**

めずらしづかこふん  
**珍敷塚古墳**

とりふねづかこふん  
**鳥船塚古墳**

ふるはたこふん  
**古畑古墳**

はるこふん  
**原古墳**

4基の装飾古墳からなる古墳時代後期の墓制や葬送観念を知る上でも重要な古墳群。発掘調査により本来の墳丘の規模や石室の構造が判明した鳥船塚古墳の墳丘の一部を追加指定する。

《名勝の追加指定》 2件

かみときくにしていえん  
**1 上時国氏庭園【石川県輪島市】**

能登半島の町野川右岸に位置する江戸時代後期に造営された豪農の庭園で、池の護岸や築山の豪快な石組みや、背後の山腹から書院前庭に至るまで苔と樹林に覆われた幽邃な雰囲気<sup>ゆうすい</sup>に特徴がある。既指定地に背景を成す山林のほか、旧耕作地やため池などを追加する。

ときくにしていえん  
**2 時国氏庭園【石川県輪島市】**

能登半島の町野川右岸に位置する江戸時代初期に造営された豪農の庭園で、背後の山腹に展開する鬱蒼とした樹林と明るい園池が対比を成し、入江と滝石組の遠近感や高低感などに特徴がある。既指定地に背景を成す山林のほか、導水路や墓所などを追加する。

《名勝及び史跡の追加指定》 1件

みとくさん とうはくぐんみささちょう  
**1 三徳山【鳥取県東伯郡三朝町】**

ほうきのくに なげいれどう  
伯耆国の天台修験の拠点で、投入堂を擁する奥の院をはじめとした奇観奇勝を成すも

のとして昭和9年（1934）に名勝及び史跡に指定された。三徳川沿いに残された未指定地のうち、奥の院の北方に下る谷筋の<sup>みとく</sup>美徳谷と呼ばれる地域を追加する。